



Title	＜翻訳＞アルムアッラカート試訳（Ⅴ）：ヒッリザ
Author(s)	池田，修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2008, 6, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105879
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムアッラカート試訳 (V)

— ヒッリザ —

池田 修*

1.

الأنباري al-Anbārī (885-940) および التبريزي al-Tibrīzī (1030-1108) とともに、この詩人の名前を次のように長々と伝えている。

الحارث بن حلزة بن مكره بن بُدَيْد بن عَبْد اللَّهِ بن مَالِك بن عَبْد سَعْد بن جُشَم بن
 ذُبْيَان بن كِنَانَة بن يَشْكُر بن بَكْر بن وَايِل بن قَاسِط بن هِنْب بن أَفْصَى بن دُعْمَى بن
 جَدِيلَة بن أَسَد بن رَبِيعَة بن نِزَار بن مَعَدَّ بن عَدْنَن بن أَدَد

al-Hārith b. Ḥilliza b. Makrūh b. Budayd b. 'Abd 'Allāh b. Mālik b. 'Abd Sa'd b.
 Jusham b. Dhubyān b. Kināna b. Yashkur b. Bakr b. Wā'il b. Qāsiṭ b. Hinb b. 'Afsā
 b. Du'mī b. Jadīla b. 'Asad b. Rabī'a b. Nizār b. Ma'add b. 'Adnan b. 'Adad.

『歌の書』¹⁾(9部 pp. 177-178) では بُدَيْد Budayd が يَزِيد Yazīd、عَبْد سَعْد 'Abd Sa'd が جُشَم بن عَاصِم Jusham b. Dhubyān となっており、ابن نِزَار b. Nizār で切れている。ムアッラカート (المُعَلَّقَاتُ al-Mu'allaqāt) の編者とされる حَمَّاد الرَّائِيَّة Hammād al-Rāwīya (695-772) がバクル族 (بَكْر Bakr) の庇護民 (مَوَالٍ mawālī) であったために、この詩人の血統が由緒あるものであることを示そうとしたと考えられる。

この詩人については、Bakr 族とタグリブ (تَغْلِب Taghlib) 族の紛争を解決するために、ラフム朝 (الَلَّحْمِيَّوْنَ al-Lakhmiyyūn) の暴君 عَمْرُو بْنُ هِنْد Amr b. Hind 王 (554-569) に仲裁を求めた事件以外の詳細は伝えられていない。両部族はともにワーイル (وَايِل Wā'il) 族を祖とする兄弟部族であったが、バスースの戦い (حَرْبُ بَسُوس Harb al-Basūs) で、ラフム朝の الْمُنْدَحِرُّ بْنُ مَاءِ السَّمَاءِ al-Mundhir b. Mā' al-Samā' 王の仲介で一度は和議を結んだ。しかし両者の関係は再び悪化し、この詩人がムアッラカ (مُعَلَّقَة mu'allaqā) を詠む背景をなす紛争が起き、Hind 王が仲裁にあたることになった。この紛争については、عَمْرُو بْنُ كُثُوم Amr b. Kulthūm (fl. 6 c.) のムアッラカのまえがきで紹介したが、al-Anbārī と al-Tibrīzī はともに、al-Hārith b. Ḥilliza がこの長詩を詠んだ背景をなす少し異なる逸話をとりあげている。『歌の書』でも同じ筋書きの逸話が伝えられているので、以下 al-Anbārī によって紹介する。

* 四天王寺大学 客員教授

1) أَبُو الْفَرَجِ الْإصْبَهَانِيّ 'Abū al-Faraj al-Iṣbahānī (897-c. 972), كِتَابُ الْأَغَانِي Kitāb al-Aghānī.

2.

‘Amr b. Hind は横暴で強大な王で、Bakr 族と Taghlib 族を集めて両者を和解させ、双方から100名ずつの若者 (غُلَامٌ *ghulām*) を人質として差し出させ、双方を牽制することとした。これらの人質は、王が旅に出るときも、遠征するときもつき従った。あるとき、王が彼らを連れて旅に出たとき、熱風 (سَمُومٌ *samūm*) に襲われ、Taghlib 族の人質は全員死亡し、Bakr 族の人質は難を逃れた。そこで Taghlib 族は、Bakr 族に、「われらの子らの血債を払え、それは貴様らの義務だ」

と申し入れた。Bakr 族はこれを拒否した。そこで Taghlib 族の族長である ‘Amr b. Kulthūm の下に集まった²⁾。‘Amr b. Kulthūm は Taghlib 族に、「今日、Bakr 族のために口上を述べるのは誰と思うか」

と尋ねた。一同が、

「多分 ثَعْلَبَةُ Tha‘laba の子でしょう」

と答えると、‘Amr b. Kulthūm は、

「神に誓って、思うに赤顔で禿頭の聾者、يَشْكُرُ Yashkur 一門の老いぼれであろう」

と言った。やがて Bakr 族は Yashkur 一門の ثَعْلَبَةُ بْنُ غَمَمٍ Tha‘laba b. Ghamam の al-Nu‘mān b. Harim を代表者として現れた。これに対して Taghlib 族は ‘Amr b. Kulthūm を代表者としてやってきた。双方が王の前にそろうと、まず ‘Amr b. Kulthūm が al-Nu‘mān b. Harim に、

「おい、聾者 Tha‘laba 一門の子らが貴様をやつらの守り手として連れてきたが、さぞかし貴様を頼りないやつだと思っていることだろう」

と言いがかりをつけた。al-Nu‘mān は、

「天が影を投げた奴³⁾を、彼らは蔑むであろう」

と言り返した。‘Amr が、

「神に誓って、私が貴様に平手打ちを一発見舞っても、彼らは貴様のために仕返しすらしてくれないだろう」

と言うと、al-Nu‘mān は、

「神に誓って、そのようなことをすればただでは済まぬぞ。貴様の親父の一物の寸法が測られというものだ (قَيْسُ أُيْرُ أَبِيكَ qīsa ‘ayru ‘abī-ka)⁴⁾」

と脅した。この罵詈を聞いて、Bakr 族よりも Taghlib 部族に好意を寄せていた ‘Amr b. Hind 王は激怒して、

「奴隷娘よ⁵⁾、こやつを女言葉で罵れ」

と叫んだ。al-Nu‘mān は、

「王よ、その罵り言葉をそっくりそのまま貴殿のお気に入りの (‘Amr b. Kulthūm に)

2) その結果、戦うのを手控え、‘Amr b. Hind 王に調停を求めることにしたものであろうが、その経過は伝えられていない。

3) ‘Amr のこと。

4) 『歌の書』では قَيْسُ بَنُ أَبِيكَ qīsa bnu ‘abī-ka。口を極めた罵詈雑言。

5) 『歌の書』では「ハーリサよ」。

くれてやりたまえ」

と応じた。王が、

「余が貴様の父であれば嬉しいのか」

と問うと、al-Nuʿmān は、

「とんでもない。母であつて欲しい」

と答えた。ここに至って、王は激怒のあまり al-Nuʿmān を殺そうとした。すると كِنَانَةُ بْنُ يَشْكُرَ Kināna b. Yashkur 一門の al-Hārith b. Ḥilliza が立って、即席に彼のムアッラカを読み始めた。彼は弓に体重をかけていたため、弓の弦 (つる) が手の平に食い込み、血が流れていたが、興奮のあまりこれに気づかず、詩を読み終えたとのことである。

al-ʿAṣmaʿī (740-828?) は、詩人がこの長詩を詠んだのは135歳のときであつたと伝えている。詩人はハンセン病にかかつており、王は詩人との間に垂れ幕を設けて詩を聞いたが、やがて詩に感心して垂れ幕を揚げ、詩人とじかに対面したとのことで、これはすでに ʿAmr b. Kulthūm の前書きで Ibn al-Kalbī の所伝として触れたとおりである。

3.

『歌の書』(9部 p.178) には、以上の逸話は أَبُو أَمْرٍ ʿAbū ʿAmr の所伝で、al-ʿAṣmaʿī もほぼ同様のことをのべている。しかし、これといささか異なる話を次のようにも取り上げている。

まず、両部族から王が預かった人質は約80人で、王が両者を和解させたのは ذُو الْمَجَازِ Dhū al-Majāz の地であつた。また、Taghlib 族の若者は王に率いられて戦闘に加わり、殺された。また、al-Hārith b. Ḥilliza が王の前で彼のカスィーダを即興で詠んだ席には ʿAmr b. Kulthūm がいて、返答として、

وَفِي قَبْلِ التَّفْرِقِ يَا طَعِيمًا ハウダジに乗っている佳人よ、しばし立ち止まれ

で始まるカスィーダである。これは ʿAmr のムアッラカの6行目の文句であり、これが事実なら、1行目から酒を詠んだ部分は後に付け加えたものとなる。

『歌の書』では、また、Ibn al-Kalbī が父から聞いた次のような逸話を伝えている。Bakr 族と Taghlib 族を和解させたのは al-Mundhir b. Māʾ al-Samāʾ 王⁶⁾であつた。両部族は、それぞれの支配領域で戦死者が見つければ、支配領域の部族が死者の血債を保証する。もし戦死者が両部族の支配領域の中間地帯で見つければ、それぞれの前線から距離が計測され、どちらの前線が近いか検討され、近い方の部族がその死者の血債を保証すると取り決めた。両部族のいずれに保証責任があるかを調査する者として、قَيْسُ بْنُ شَرَاهِيلَ بْنِ مُرَّةَ بْنِ هُمَامٍ Qays b. Sharāhil b. Murra b. Humām が任命されたが、彼は Taghlib 族の庇護民であつた。

次いで al-Mundhir 王は両部族貴族や名士を選びメッカに派遣し、互いに誓約させ

6) ʿAmr b. Hind 王の父で、554年没。

た。そこで彼らは、何人も相手に危害を加えない、相手に対する血債の支払いを求めないなどを申し合わせた。彼らは神の思召しになる期間、そこに留まった。al-Mundhir 王は両部族の若者を人質とし、もし誰かが相手の権利を侵害すれば人質にその報復を加えると告げた。

やがて、al-Mundhir 王は Taghlib 族の騎馬隊をある用件のため、タイイ族の山 (جَبَل طَيِّي Jabal Tayyi') に派遣し、الطَّرْفَة al-Ṭarafa というところに泊まった。その山は بَنُو شَيْبَانَ Banū Shaybān と تَيْم اللَّاتِ Taym al-Āllāt の領域にあった。彼らは Taghlib 族の騎馬隊を水場から締め出し、砂漠に追いやった。ために、兵らは渴きのために死んでしまった。この情報が Taghlib 族に伝えられると、彼らは立腹して、ʿAmr b. Hind のもとにやって来て、Bakr 族に対して復讐することを求めた (すなわち、بَنُو شَيْبَانَ Banū Shaybān と Taym al-Āllāt は Bakr 族に属していたのである)。Taghlib 族は (Bakr 族に)、

「貴方は裏切った。誓約を破り、聖なる約定に違反し、血を流した」

と告げた。これに対して Bakr 族は、

「貴方こそ違約している。われらを悪し様に罵り、人々の間に悪評をかきたてた。われらについて、誤った話を作り上げることによって、ヴェールと帳を破ったのである。われらは彼らが水場に來たときには水を飲ませ、道案内までしてやったのである。彼らを取り乱し、道に迷ったのにつき、われらに如何なる咎があるのか」

と反論した。al-Hārith b. Ḥilliza の次の1行 (ムアッラカ64行) は、これが事実であったことを証明している。

٦٤- لَمْ يَغْرُوكُمْ غُرُورًا وَلَكِنْ يَرْفَعُ الْآلُ جَمْعَهُمُ وَالضَّحَاءُ

64-彼らはお前たちを欺き不意打ちをしたのではない。蜃気楼と白昼の明かりが王の軍勢を浮かび上がらせたため、お前たちは混乱し破滅したのである。

al-Hārith b. Ḥilliza のムアッラカには、数多くの أَيَّامُ الْعَرَبِ Ayyām al-ʿArab (アラブが戦った日々) が取り上げられているのが特徴をなしている。この長詩は خَفِيف khafif 調、85行⁷⁾よりなり、ナシーブ (نَصِيب naṣīb) とラクダに関する部分は比較的短い。詩の大部分においては Taghlib 族の ʿAmr b. Kulthūm によってなされた Bakr 族への中傷に対する反論と、自部族の過去の栄光を引き合いに出して、これを誇り讃えている。加えてラフム朝の ʿAmr b. Hind 王を称賛している。

古来、この詩は他のムアッラカートに比べ劣るが、詩集の編者とされている Hammād al-Rāwiyā が Bakr 族の庇護民であったため、部族への党派心にかかれて、Taghlib 族の詩人 ʿAmr b. Kulthūm とバランスをとるために、詩集に加えたものであろうと言われている。とはいえ、この詩は部族間の歴史的な事件への政治的演説の趣があり、論述がいちいち証拠に基づいており、ジャーヒリーヤ詩の中でユニークな作品であると言えよう。

7) al-Tibrizī により1行追加して、85行である。

قَصِيدَةُ الْحَارِثِ بْنِ جِلْزَةَ

- ١- آذَنْتُنَا بِبَيْتِهَا أَسْمَاءُ
- ٢- بَعْدَ عَهْدٍ لَهَا بِبُرْقَةٍ شَمَاءُ
- ٣- فَمُحْيَاةٌ فَالْصَّفَاحُ فَأَعْلَى
- ٤- فَرِيَاضُ الْقَطَا فَأَوْدِيَةُ الشُّرْ
- ٥- لَا أَرَى مَنْ عَهَدْتُ فِيهَا فَأُبْكِي الـ
- ٦- وَبَعَيْنَيْكَ أَوْقَدْتُ هِنْدُ النَّا
- ٧- أَوْقَدْتُهَا بَيْنَ الْعَقِيْقِي فَشَخْصِيْ
- ٨- فَتَنَوْرَتْ نَارَهَا مِنْ بَعِيدِ
- ٩- غَيْرَ أَلَى قَدْ أَسْتَعِينُ عَلَى الْهَـ
- ١٠- بِرَفُوفٍ كَأَنَّهَا هَفْلَةٌ أـ
- ١١- آتَسْتُ نَبَاةً وَأَفْرَعَهَا الْقـ
- ١٢- فَتَرَى خَلْفَهَا مِنَ الرَّجْعِ وَالْوَفـ
- ١٣- وَطِرَاقًا مِنْ خَلْفِهِنَّ طِرَاقُ
- ١٤- أَتْلَهَى بِهَا الْهَوَاجِرَ إِذْ كـ
- ١٥- وَأَتَانَا عَنْ الْأَرَاقِمِ أَنْبَا
- ١٦- أَنَّ إِخْوَانَنَا الْأَرَاقِمَ يَغْلُو
- ١٧- يَخْلِطُونَ الْبَرِيءَ مِنَّا بِذِي الدَّنـ
- ١٨- زَعَمُوا أَنَّ كُلَّ مَنْ ضَرَبَ الْعِيـ
- ١٩- أَجْمَعُوا أَمْرَهُمْ بِلَيْلٍ فَلَمَّا
- ٢٠- مِنْ مُنَادٍ وَمِنْ مُجِيبٍ وَمِنْ تَصـ
- ٢١- أَيُّهَا النَّاطِقُ لِمُرْقَشٍ عَنَّا
- ٢٢- لَا تَخْلُنَا عَلَى غَرَائِكَ إِنَّا
- ٢٣- فَيَقِينَا عَلَى الشَّنَاءَةِ تَنَمِيـ
- ٢٤- قَبْلَ مَا الْيَوْمَ بَيَّضَتْ بِغُيُونِ الـ
- ٢٥- وَكَأَنَّ الْمُتُونِ تَرْدَى بِنَا أَرـ
- ٢٦- مُكْفَهَّرًا عَلَى الْحَوَادِثِ لَا تَرـ
- ٢٧- أَيْمًا خُطَّةٍ أَرَدْتُمْ فَأَدُّو
- رُبَّ ثَاوِيٍّ يَمَلُّ مِنْهُ الثَّوَاءُ
- ءَ فَأَذْنَى دِيَارِهَا الْخَلْصَاءُ
- ذِي فِتَاقٍ فَعَاذِبُ فَالْوَفَاءُ
- بُيِّ فَالْشُّعْبَتَانِ فَالْأَبْلَاءُ
- يَوْمَ ذَلَّهَا وَمَا يَرُدُّ الْبُكَاءُ
- رَ أَخِيرًا تُلَوِي بِهَا الْعَلِيَاءُ
- مِنْ يَغُودٍ كَمَا يَلُوحُ الضِّيَاءُ
- بَخَرَارِ هَيْهَاتَ مِنْكَ الصَّلَاءُ
- مَّ إِذَا خَفَّ بِالثَّوِي النَّجَاءُ
- مُ رَيْثَالٍ دَوِيَّةٌ سَقْفَاءُ
- نَّاصُ عَصْرًا وَقَدْ دَنَا الْإِمْسَاءُ
- عَ مَنِينًا كَأَنَّهُ إِهْبَاءُ
- سَاقِطَاتٌ تُلَوِي بِهَا الصَّخْرَاءُ
- لُ ابْنِ هَمٍّ بَلِيَّةٌ عَمِيَاءُ
- ءَ وَخَطْبُ نَعْنَى بِهِ وَتُسَاءُ
- نَ عَلَيْنَا فِي قَوْلِهِمْ إِخْفَاءُ
- بِ وَلَا يَنْفَعُ الْخَلِيَّ الْخَلَاءُ
- رَ مَوَالٍ لَنَا وَأَتَا الْوَلَاءُ
- أَصْبَحُوا أَصْبَحَتْ لَهُمْ ضَوْضَاءُ
- هَالِ خَيْلٍ خِلَالِ ذَاكَ رُغَاءُ
- عِنْدَ عَمْرِو وَهَلْ لِذَاكَ بَقَاءُ
- قَبْلُ مَا قَدْ وَشَى بِنَا الْأَعْدَاءُ
- نَا خُصُوفٌ وَعِزَّةٌ قَعْسَاءُ
- نَّاسٍ فِيهَا تَعِيْطٌ وَابَاءُ
- عَنْ جَوْنًا يَنْجَابُ عَنْهُ الْعَمَاءُ
- تُوهُ لِلدَّهْرِ مُؤَيِّدُ صَمَاءُ
- هَآ إِلَيْنَا تَمْشِي بِهَا الْأُمَلَاءُ

قِبَ فِيهِ الْأَمْوَاتُ وَالْأَحْيَاءُ
 سٌ وَفِيهِ الصَّلَاحُ وَالْإِبْرَاءُ
 حَمَصَ عَيْنًا فِي جَفْنِهَا أَقْدَاءُ
 دَثُّمُوهُ لَهُ عَلَيْنَا الْعَلَاءُ
 سٌ غَوَارًا لِكُلِّ حَيٍّ غَوَاءُ
 رَيْنَ سَيْرًا حَتَّى نَهَاها الْحِسَاءُ
 نَا وَفِينَا بَنَاتٌ مُرِّ إِمَاءُ
 لَ وَلَا يَنْفَعُ الذَّلِيلَ النَّجَاءُ
 رَأْسُ طُودٍ وَحَرَّةٌ رَجْلَاءُ
 مَلَكُ الْمُنْذِرُ بْنُ مَاءِ السَّمَاءِ
 مِ الْحَيَّارَيْنِ وَالْبَلَاءُ بَلَاءُ
 جَدُ فِيهَا لِمَا لَدَيْهِ كِفَاءُ
 تَعَاشُوا فِي التَّعَاشَى الدَّاءُ
 لَدِّمَ فِيهِ الْعُهُودُ وَالْكَفَّالَاءُ
 قُصُ مَا فِي الْمَهَارِقِ الْأَهْوَاءُ
 مَا اشْتَرَطْنَا يَوْمَ اخْتَلَفْنَا سَوَاءُ
 نَمَ غَارِيهِمْ وَمِنَّا الْجَزَاءُ
 جَمَعَتْ مِنْ مُحَارِبٍ غَبْرَاءُ
 لِدِرَ فَإِنَّا مِنْ حَرْبِهِمْ بُرَاءُ
 طَ بِجُوزِ الْمُحْمَلِ الْأَعْبَاءُ
 سَنَ عَلَيْنَا مِمَّا جَنَوْا أَنْدَاءُ
 سٌ وَلَا جَنْدَلٌ وَلَا الْحَدَّاءُ
 لَ لِيُطَسِّمَ أَخُوكُمْ الْأَبَّاءُ
 تَرُ عَنْ حَجَرَةِ الرَّبِيعِ الطَّبَّاءُ
 هُمْ رِمَاحُ صُدُورُهُنَّ الْقَضَاءُ
 ءِ نِطَاحٍ لَهُمْ عَلَيْهِمْ دُعَاءُ
 بِنَهَابٍ يَصُمُّ فِيهِ الْخُدَاءُ
 جِجَ لَهُمْ شَامَةٌ وَلَا زَهْرَاءُ
 ظَهَرَ وَلَا يَبْرُدُ الْعَلِيلُ الْمَاءُ

٢٨- إِنْ نَبَشْتُمْ مَا بَيْنَ مِلْحَةٍ فَالْصَّاهِ
 ٢٩- أَوْ نَقَشْتُمْ فَالنَّقْشُ تَجَشُّمُهُ النَّاهِ
 ٣٠- أَوْ سَكْتُمْ عَنَّا فَكُنَّا كَمَنْ أَعْدَى
 ٣١- أَوْ مَنَعْتُمْ مَا تُسْأَلُونَ فَمَنْ حُجِّ
 ٣٢- هَلْ عَلِمْتُمْ أَيَّامَ يُنْتَهَبُ النَّاهِ
 ٣٣- إِذْ رَفَعْنَا الْجَمَالَ مِنْ سَعْفِ الْبَحْرِ
 ٣٤- ثُمَّ مَلْنَا عَلَى تَمِيمٍ فَأَحْرَمُ
 ٣٥- لَا يُقِيمُ الْعَزِيزُ بِالْبَلَدِ الشَّهْرُ
 ٣٦- لَيْسَ يُنْجِي مُوَائِلًا مِنْ حِذَارِ
 ٣٧- فَمَلَكْنَا بِذَلِكَ النَّاسَ حَتَّى
 ٣٨- وَهُوَ الرَّبُّ وَالشَّهِيدُ عَلَى يَوْمِ
 ٣٩- مَلِكٌ أَضْلَعُ الْبَرِّيَّةَ لَا يُؤْمَرُ
 ٤٠- فَاتْرُكُوا الْبَغْيَ وَالتَّعَدَّى وَإِمَّا
 ٤١- وَادْكُرُوا حِلْفَ ذِي الْمَجَارِ وَمَا قَدْ
 ٤٢- حَذَرَ الْخَوْنَ وَالتَّعَدَّى وَهَلْ يَنْدُرُ
 ٤٣- وَاعْلَمُوا أَنَّنا وَإِيَّاكُمْ فِيهِ
 ٤٤- أَعْلَيْنَا جُنَاحُ كِنْدَةٍ أَنْ يَغْدُرَ
 ٤٥- أَمْ عَلَيْنَا جَرَى حَنِيفَةٍ أَوْ مَا
 ٤٦- أَمْ جَنَائَا بَنَى عَتِيقٍ فَمَنْ يَغْدُرُ
 ٤٧- أَمْ عَلَيْنَا جَرَى الْعِبَادِ كَمَا يَنْبَغِي
 ٤٨- أَمْ عَلَيْنَا جَرَى قُضَاعَةٍ أَمْ لَيْدِ
 ٤٩- لَيْسَ مِنَّا الْمُضَرَّبُونَ وَلَا قَيْدِ
 ٥٠- أَمْ عَلَيْنَا جَرَى إِيَادٍ كَمَا فِيهِ
 ٥١- عَنَّا بَاطِلًا وَظُلْمًا كَمَا تُعَدُّ
 ٥٢- وَثَمَانُونَ مِنْ تَمِيمٍ بِأَيْدِيهِ
 ٥٣- لَمْ يُخْلُوا بَنَى رِزَاحٍ بِبَرْقَا
 ٥٤- تَرَكُوهُمْ مُلَحَّيْنِ فَأَبَوْا
 ٥٥- وَأَتَوْهُمْ يَسْتَرْجِعُونَ فَلَمْ تَرَ
 ٥٦- ثُمَّ فَاءُوا مِنْهُمْ بِقَاصِمَةِ الْ

٥٧- ثُمَّ حَيْلٌ مِنْ بَعْدِ ذَلِكَ مَعَ الْ
 ٥٨- مَا أَصَابُوا مِنْ تَغْلِيْبِيٍّ فَمَطَّلُوا
 ٥٩- كَتَكَالِيفٍ قَوْمَنَا إِذْ غَزَا الْمُذْ
 ٦٠- إِذْ أَحَلَّ الْعَلَاةَ قُبَّةَ مَيْسُو
 ٦١- فَتَاوَتْ لَهُمْ قَرَاظِيَّةٌ مِنْ
 ٦٢- فَهَدَاهُمْ بِالْأَسْوَدَيْنِ وَأَمْرُ اللَّهِ
 ٦٣- إِذْ تَمَنَّوْنَهُمْ غُرُورًا فَسَاقَتْ
 ٦٤- لَمْ يَغْزُواكُمْ غُرُورًا وَلَكِنْ
 ٦٥- أَيُّهَا الشَّائِي الْمُبَلِّغُ عَنَّا
 ٦٦- إِنَّ عَمْرًا لَنَا لَدَيْهِ خِلَالٌ
 ٦٧- مَلِكٌ مُقْسِطٌ وَأَكْمَلُ مَنْ يَمُ
 ٦٨- إِرْمِي بِمِثْلِهِ جَالَتِ الْحِ
 ٦٩- مَنْ لَنَا عِنْدَهُ مِنَ الْخَيْرِ آيَا
 ٧٠- آيَةٌ شَارِقُ الشَّقِيقَةِ إِذْ جَا
 ٧١- حَوْلَ قَيْسٍ مُسْتَلِيمِينَ بِكَبْشٍ
 ٧٢- وَصَنِيَتْ مِنَ الْعَوَاتِكِ مَا تَنْ
 ٧٣- فَجَبَّهْنَاهُمْ بِضَرْبٍ كَمَا يَخُ
 ٧٤- وَحَمَلْنَاهُمْ عَلَى حَزْنٍ ثَهَلَا
 ٧٥- وَقَعَلْنَا بِهِمْ كَمَا عَلِمَ اللَّهُ
 ٧٦- ثُمَّ حُجِّرًا أَعْنَى ابْنِ أُمِّ قَطَامٍ
 ٧٧- أَسَدٌ فِي اللَّقَاءِ وَرَدَّ هُمُوسٌ
 ٧٨- فَردَدْنَاهُمْ بِطَعْنٍ كَمَا تُذْ
 ٧٩- وَفَكَكْنَا غُلَّ أَمْرِئِ الْقَيْسِ عَنْهُ
 ٨٠- وَأَقْدَنَاهُ رَبَّ غَسَّانٍ بِالْمُنْ
 ٨١- وَقَدَيْنَاهُمْ بِتِسْعَةِ أُمْلَاكٍ
 ٨٢- وَمَعَ الْجَوْنِ جَوْنُ آلِ بَنِي الْأَوْ
 ٨٣- مَا جَرَعْنَا تَحْتَ الْعَجَاجَةِ إِذْ وَ
 ٨٤- وَوَلَدْنَا عَمْرُو بْنَ أُمِّ أَنْاسٍ
 ٨٥- مِثْلَهَا تُخْرِجُ النَّصِيحَةَ الْقُرْ

خَلَّاقٍ لَا رَافَةَ وَلَا إِبْقَاءَ
 لَ عَلَيْهِ إِذَا تَوَلَّى الْعَفَاءَ
 لِرُّ هَلْ نَحْنُ لِابْنِ هِنْدٍ رِعَاءُ
 نَ فَأَذْنَى دِيَارِهَا الْعَوْصَاءُ
 كُلِّ حَيٍّ كَانَتْهُمْ أَلْقَاءُ
 هُ بَلَغَ يَشْقَى بِهِ الْأَشْقِيَاءُ
 هُمْ إِلَيْكُمْ أُمْنِيَّةٌ أَشْرَاءُ
 يَرْفَعُ الْآلَ جَمْعَهُمُ وَالضَّحَاءُ
 عِنْدَ عَمْرٍو وَهَلْ لِذَاكَ انْتِهَاءُ
 غَيْرِ شَكٍّ فِي كُلِّهِنَّ الْبَلَاءُ
 شَيْ وَمِنْ دُونِ مَا لَدَيْهِ الثَّنَاءُ
 نَ فَآبَتْ لِحَضَمِهَا الْأَجْلَاءُ
 تْ ثَلَاثٌ فِي كُلِّهِنَّ الْقَضَاءُ
 ؤُوا جَمِيعًا لِكُلِّ حَيٍّ لَوَاءُ
 قَرْظِي كَانَتْهُ عِبْلَاءُ
 هَاهُ إِلَّا مُبِضَّةٌ رَعْلَاءُ
 رُجٌ مِنْ خُرْبَةِ الْمَزَادِ الْمَاءُ
 نَ شِلَالًا وَدُمَى الْأَنْسَاءُ
 هُ وَمَا إِنْ لِلْحَائِيَيْنِ دِمَاءُ
 وَلَهُ فَارِسِيَّةٌ خَضْرَاءُ
 وَرَبِيعٌ إِنْ شَنَّتْ غَبْرَاءُ
 هَرُ عَنْ جَمَّةِ الطَّوِيِّ الدَّلَاءُ
 بَعْدَ مَا طَالَ حَبْسُهُ وَالْعَنَاءُ
 لِرِّ كَرَّهَا إِذْ لَا تُكَالُ الدَّمَاءُ
 نَدَامَى أَسْلَابُهُمْ أَغْلَاءُ
 سَ عَنُودٌ كَانَتْهَا دَفَوَاءُ
 لَتْ بِأَقْفَائِهَا وَحَرَ الصَّلَاءُ
 مِنْ قَرِيبٍ لَمَّا أَتَانَا الْحَبَاءُ
 مَ فَلَاةٌ مِنْ دُونِهَا أَفْلَاءُ

- 1- アスマーウ⁸⁾ はまもなく別れ行くとわれらに告げた。多くの逗留者は、長居すれば飽きられるものだが (彼女に限って、何時までいても疎まないのに)。
- 2- シャンマーウの石ころの多い丘で彼女と知り合った。ついで彼女のもっとも近い住まいはアル=ハルサーウになり⁹⁾、
- 3- ついでムハイヤートからアル=スィファーフ、さらにズー・フィタークの高台に移り、次はアジブからアル=ワファーフウに移った¹⁰⁾。
- 4- さらに、アル=カターの牧草地へ、ついでアル=シュルブの谷あいを経てアル=シュウバターン、さらにはアル=アブラウへと移り住んだ (このあいだ、ながらく共にあった彼女が別れ行くと告げたのである)¹¹⁾。
- 5- これらの住まいで知り合った人に、今はもはや会えないゆえに、往時をしのんで、懐かしさにかかれ、私は泣く。泣いたとて、どうにもならないのだが。
- 6- 最後に逢ったとき、ヒンド¹²⁾ はお前の見えるところで、火を燃やしたが、(火を燃やした) 高台は彼女の姿をゆらゆらと指し示しているようであった。
- 7- 彼女はアル=アキークとシャフサーンの中ほどで沈香木で火を燃やしたが、それは真昼のように輝いていた¹³⁾。
- 8- 私は彼女の火を遙か遠くのハザーズ¹⁴⁾ の地で見つめたが、(彼女のもとを訪ねるにしては)、そなたはなんと遠くにいることか。
- 9- けれども、逗留者が急ぎ去った後、私は悲しみを乗り越えるために (雌ラクダに) 救いを求める。
- 10- すなわち、私は駿足の雌ラクダに乗るが、その素早さは、雛鳥を連れた砂漠の足長の雌ダチョウを思わす。
- 11- 夕方、いよいよ夜に入る頃、ダチョウは獵師の囁き声に気づいて、恐れを抱く。
- 12- あなたは、ダチョウが足で地面を踏んで走るとき、背後に土煙のような砂塵が舞い上がるのを見るであろう。
- 13- 足跡の上に足跡が重ねられ、それを砂漠がすぐに消してしまうのを見るであろう¹⁵⁾。
- 14- 不安に駆られる人々が、墓につながれたラクダのように当惑しているとき、私は正午の酷暑も厭わず、ラクダに乗って気晴らしをする。
- 15- アル=アラーキム¹⁶⁾ に関する知らせと、われらに災いをもたらしかねない情報もたらされた。
- 16- すなわち、われらの兄弟アル=アラーキムはわれらに他人の罪を背負わす、行き過

8) أَسْمَاءُ *Asmā'* は詩人の恋人だった女性。

9) شَمَاءُ *Shammā'* は砂山名。الْخُلْصَاءُ *al-Khalṣā'* はアラビア半島南部 الدَّهْنَاءُ *al-Dhahnā'* 砂漠内の地名。

10) الْمُحَيَّاءُ *al-Muḥayyā'*、الصَّفَاحُ *al-Ṣufāḥ*、الْوَفَاءُ *al-Wafā'* はいずれも地名。دُو فِتَاقٍ *Dhū Fitāq* は山の名、عَذِيبُ *Ādhib* は溪谷名。

11) الْقَطَا *al-Qaṭā'* は地名。الشُّرْبُوبُ *al-Shurbub* は山の名。الشَّعْبَتَانِ *al-Shu'batān* は「双頭の山」、または丘の名、الْأَبْلَاءُ *al-ʾAblā'* は地名で、水場があった。

12) هِنْدُ *Hind* は詩人が付き合っていた女性の一人。

13) العَقِيقُ *al-ʿAqīq*、شَخْصَانُ *Shakhṣān* はいずれも地名。

14) خَزَارُ *Khazāz* は *al-ʿAqīq* と *Shakhṣān* (前行7行) の二つの土地の中間にあった山。

15) 11~13行では、ラクダがダチョウのように駿足であることを自慢している。

16) الأَرَاقِمُ *al-ʾArāqim* とは Taghlib 族を指す。

ぎた言辞を弄した。

- 17- 彼らは、無実のわれらを罪あるものと混同した。潔白が無実の者に役立たなくなった。
- 18- 彼らは、「野生のロバを撃つ者はすべてわれらの庇護民である。われらが彼らの主人である」と主張した。
- 19- 彼らは夜、われらを攻めることを申し合わせ、朝になると大いに騒ぎ始めた。
- 20- ある者は呼びかけ、ある者はこれに答え、馬はいななき、それにラクダの鳴き声が混ざっていた。
- 21- われらのことをアムル王に言葉巧みに讒訴する者よ、お前の嘘話が果たして何時まで通用するのか¹⁷⁾。
- 22- お前がわれらを (ヒンド王) に中傷したからと言って、われらを挫くなどとゆめゆめ思うな。今までも多くの敵がわれらを中傷したが、われらは揺るぎなかった。
- 23- われらは人々から謂れない憎しみを受けながら、生き長らえ、秀でた父祖¹⁸⁾と揺るぎない威力がわれらの地位を高めた。
- 24- 今日までわれらの威力は輝き、人々の目を見えないようにしたが、そこには不当な圧力を断固はねつける力が備わっていたのである。
- 25- われらを襲う運命は、山頂が白雲の上に突き出た黒く聳える山岳を襲うようなものである¹⁹⁾。
- 26- 重々と岩で積み上げられたこの山岳は、運命がもたらす災難から頑強に身を守り、その無情な鉄槌にも挫けない。
- 27- お前たちがどのような争いごとを望んでいようと、その詳細をわれらに届けよ。部族の指導者らが、しかるべき処理するであろう。
- 28- もしお前たちがミルハとアル=サーキブ山のあいだの戦場となった土地を掘って調べれば、戦死者や生者らの跡を見出すであろう²⁰⁾。
- 29- 調査は多大の労苦を伴うが、お前たちが調べてみれば、われわれが正しく無実であることが明らかとなる。
- 30- もしお前たちがわれらについて口を閉じ、真実を語らないなら、われわれは瞋にこみが入り、目を閉じる者となろう (憎しみを抱いてそっぽを向くだろう)。
- 31- お前たちが尋ねられていることへの返事を拒むのであれば、(われらより優れた民はいないのに) 一体誰にわれらより上位にあると告げられたのか。
- 32- お前たちは人々が襲撃され、略奪され各部族がうなり声をあげた戦いの日々を知らないのか。よく知っているであろう。
- 33- われらがアル=バハラインのナツメヤシのもとからラクダに乗って急行し、ついにはアル=ヒサーウ²¹⁾の地にいたった (が、われらの行軍を邪魔することのできる者はいなかった)。
- 34- ついで、われらはタミーム族へと向かったが、神聖月に入ったので、(戦いは控えた) がわれらのもとはすでに、ムッラ族から捕らえられた娘たちが端た女 (はし

17) ‘Amr 王とは ‘Amr b. Hind 王、「讒訴する者」とは詩人 ‘Amr b. Kulthūm のこと。

18) 「父祖 *ḥuṣūn* *ḥuṣūn*」と訳したのは al-Tibrīzī によったもので、al-ʿAnbārī では「砦」となっている。

19) 「われわれは如何なる災難にもめげず、超然としている」との意味。

20) *milḥa* *milḥa* は地名。ここと *al-ṣāqib* *al-ṣāqib* 山のあいだが戦場であった。

21) *al-ḥisāʾ* *al-ḥisāʾ* は *fazāra* *fazāra* 族の水場。

ため)として働いていた²²⁾。

35- 威勢ある者も平地に留まれないし、弱者は逃げ急いでも無益である。

36- 恐怖に怯える逃亡者がたとえ山の頂や、堅固な黒い岩場に身を寄せても、われらから助かるはずはない。

37- かくして、われらは人々を支配したのであるが、やがてアル=ムンジル・イブン・マーウ・アル=サマーウが王者となった。

38- 彼こそは主であり、アル=ヒヤーラインの戦いで、苦難がまことの試練であった日の目撃者である²³⁾。

39- 彼は人間の中で最強の人物であり、彼らの中には彼に匹敵する者はいない。

40- よって、お前たちは嘘偽りと敵対行為を止めるがよい。もしお前たちが(我々と戦った日に何をしたかについて)知らない振りをし続けるなら、必ずや災難に襲われるであろう。

41- ズー・アル=マジヤーズ²⁴⁾でも、誓約とこれによって差し出された人質と保証人のことを思い起こせ。

42- 裏切りと敵対行為を警戒して(なされた誓約であり)、羊皮紙に記された取り決めを勝手気ままに違反してはならない。

43- われらとお前たちは、誓約束を取り交わした日に双方に課した条件は同じであることをよく弁えるがよい。

44- キンダ族の襲撃者らがお前たちに略奪を働いたからといって、われらにその罪があるのか。われらがその償いをしなければならないのか²⁵⁾。

45- それとも、われらにはハニーファの悪行と、ムハーリブの乞食泥棒どもが集めた盗品に責任があるというのか²⁶⁾。

46- あるいはバヌー・アティークの罪業につき、われらに責任があるというのか。誰が誓いを破って戦おうとわれらは無実である²⁷⁾。

47- われらにはアル=イバード²⁸⁾の罪業に責任があり、荷ラクダの背中に重荷を乗せるようにわれらにその責めを負わすつもりか。

48- それとも、われらにはクダーア族の罪業に責任があるというのか。われらはかれらの犯罪につき露ほどのかわりも無い²⁹⁾。

22) 神聖月に入る前にすでに戦利品を得ていたことを述べている。

23) al-Mundhir 王は Yashkur 族を率いて、الْحِيَارَيْنِ al-Hiyārayn の住民を攻撃したことがあった。

24) ذُو الْمَجَازِ Dhū al-Majāz はメッカ近くの地名で、Taghlib、Bakr 両部族が和議を誓約したところ。

25) Kinda 一族が Taghlib 族を襲い、損害を与えたことがあった。

26) سُهَيْمِ Suhaym 族の شَمْرُ بْنُ عَمْرِو بْنِ الْحَنْفِيِّ Shmr b. ‘Amr al-Hanafi なる者、即ち حَنِيفَةَ Hanifa 族出の男が、ラフム朝の al-Mundhir b. Mā’ al-Samā’ 王がビザンツ帝国の緩衝国家 غَسَّانَ Ghassān 領に侵攻したとき、Ghassān 王 جَبَلَةَ بْنِ الْحَارِثِ al-Hārith b. Jabla としめし合わせて、al-Mundhir 王に味方する振りをして接近し、油断しているところをついて殺すという事件がこの句の背景をなしている。なお、مُحَارِبِ muḥārib のことは不明。

27) بَنُو عَتِيقِ Banū ‘Atīq は Taghlib 族を襲って損害を与えたことがあった。

28) الْإِبَادِ al-‘Ibād とは、الْحِمِيرَةِ al-Hīra に住んでいた雑多なアラブで、キリスト教徒であった。彼らも Taghlib 族を襲ったことがある。

29) Taghlib 族は قُضَاعَةَ Qudā‘a 族に襲われて被害を受けたが、その復讐をしていないことを揶揄している。

- 49- われらは刀で切られたものではない。すなわち、カイスやジャンダルやアル=ハッダーウ³⁰⁾ などとは違うのである。
- 50- われらにはイヤードの罪業の責任が課せられるのか。タスムが、「お前の兄弟は大謀反人だ」と言われたように、われらに他人の罪を押しつけるつもりか³¹⁾。
- 51- (われらに罪を被せようとするお前たちの訴えは) 偽りの訴えであり、不当なものである。(ラジャブ月の生贄には囲いの中の羊を充てるが)、かわってレイヨウが供えられるようなものだ³²⁾。
- 52- タミーム族の80人の男たちが槍を手にして襲ったが、その穂先は死をもたらすものであった。
- 53- (襲われた) バヌー・リザーフはニターウの荒地から自由に逃げることもできず、侵略者らをひたすら呪った。
- 54- タミーム族はバヌー・リザーフを切り刻んだまま捨て置き、ラクダの御者の声さえ聞こえないような喧騒の中を、略奪品を大量運びながら引き揚げた。
- 55- バヌー・リザーフはタミーム族の下に来て、分捕り品の返還を求めたが、黒ラクダ1頭も、白ラクダ1頭も返してもらえなかった。
- 56- バヌー・リザーフは背を折られ (失意のうちに) 引き返したが、無念の渴きは水では癒されなかった³³⁾。
- 57- やがてアル=ガッラークに率いられた (バヌー・ヤルブーウ・イブン・ハンザラの) 軍馬がお前たちを襲ったが、彼らは情け容赦せず、お前たちを生き残らせるつもりもなかった³⁴⁾。
- 58- 彼らが殺したタグリブたちすべての血は、アル=ガッラークが引き揚げる頃には土の中に消されてしまった。
- 59- アル=ムンジルが攻めたとき、これに従ったわが民の苦難は、「われらはヒンドのせがれの牧童か」と言って従わなかったお前たちの苦難と同じであろうか³⁵⁾。
- 60- アムル・イブン・ヒンドが (奪ったガッサーン家の姫) マイスーンのためにテントをアル=アラートに建てて住ませたが、そこに最も近いのはアル=アウサーウの地であった³⁶⁾。
- 61- 彼ら (アムル・イブン・ヒンド軍) のもとには各部族の貧者らが集まってきたが、

30) قَيْس Qays, جَنْدَل Jandal, الْحَدَّاءُ al-Haddā' の3名の男は Taghlib 族の者。al-Haddā' だけは رِبِيعَة Rabī'a 族の者とも言われている。

31) إِيَاد Iyād は, الْجَمْرَة al-Jimra と الْأُبُلَّةُ al-Ubulla の間を流れる سِنْدَاد Sindād 河周辺に住んでいた雄族で、ペルシア軍を何回も破ったことがあると伝えられている。تَاسَم Tasm という者には جَدِيس Jadis という兄弟がいて、後者が王に納める税金を奪って逃亡した。そこで王は Tasm を捕らえて弁償させようとした。他人の罪を関係ない者に負わせるのに譬えている。

32) 当時、アラブは、羊が100頭になって رَجَب Rajab 月に入ると、一頭を屠殺して神に捧げる慣わしがあった。羊の代わりにレイヨウを供える代用策もあった。

33) 52~56行は, بَنُو سَعْدِ بْنِ مَنَاةٍ Banū Sa'd b. Manāt b. Tamīm の 'Amr という者が80名の Tamīm 族の部下を率いて、al-Yaman 近くの بَطَاة Niṭā' の地で Taghlib 族の بَنُو رِزَاح Banū Rizāh を襲って、多くの戦利品を略奪した事件について述べている。

34) الْغَلَّاق al-Ghallāq は Tamīm 族の بَنُو يَرْبُوعِ بْنِ حَنْظَلَةَ Banū Yarbū' b. Ḥanzala に属する男。

35) Bakr 族は 'Amr b. Hind 王を助けたが、Taghlib 族は助けなかったと言っている。

36) مَيْسُون Maysūn については後註43を参照のこと。

- 彼らはまるで捨てられたごみのようであった (まるで鷺のようであった)³⁷⁾。
- 62- 王は軍勢に糧食としてナツメヤシの実と水を持たせて、これを率い、「神の命令はあまねく達せられる。惨めな者は惨めさを味わうのが定めだ」と告げた。
- 63- おまえたち (ダグリブ族) は自力にうぬぼれて、王の軍勢を打とうとした。お前たちの傲慢な欲望があだとなり、彼らを戦いに駆り立ててしまった。
- 64- 彼らはお前たちを欺き不意打ちをしたのではない。蜃気楼と白昼の明かりが王の軍勢を浮かび上がらせたため、お前たちは混乱し破滅したのである。
- 65- アムル王にわれらに憎しみを抱いて讒訴する男 (アムル・イブン・クルスーム) よ、お前の嘘話はどこで終わるのか³⁸⁾。
- 66- アムル王はわれらに親愛の情を持ち合わせている。その情愛は疑いもなく恩恵である。
- 67- アムル王は公正な王者で、地上を歩むことのない完全無欠の人物である。あらゆる賞賛を超える有徳者である。
- 68- イラムの由緒ある血筋につながる王であり、勇者らも彼の人徳を打ち明け、敵対者もこの明白な事実を認める³⁹⁾。
- 69- 王はわれらがよく仕えたことを三つの証拠によってしかと弁えている。そのすべてにおいてわれらが正当であると裁いたのである。
- 70- 第一に、東方のアル=シャキーカ族が襲撃して来たとき、各部族はそれぞれの軍旗をなびかせていた⁴⁰⁾。
- 71- カイス (イブン・マアディーカルブ) の周りを固める兵らは鎧兜で身を固め、白い岩山のようなカラズ⁴¹⁾の隊長に率いられていた。
- 72- 加えて (キンダ王家) の養女らがカイスのもとに控えていた。この軍勢を阻止するのは、白い骨を露わにする強烈な (われらの) 槍の突き刺しのみ。
- 73- われらは彼らの額を槍で突き刺すと傷口から、水袋の穴から水が迸り出るように、血が噴き出した。
- 74- われらは彼らをサフラーン山の荒地にちりぢりに追い込んだ。彼らのかかとの腱は噴き出す血で赤く染まっていた。
- 75- われらは彼らを殺戮したが、その全容を知るのは神のみ。彼らは破滅を迎えるが、復讐されないまま血は流れた。
- 76- ついで、われらはフジュル、すなわちウナム・カタームのせがれ⁴²⁾の軍勢を攻めたが、彼はペルシャ製の緑の武具で身を固めていた。

37) اَلْقَاءُ *alqā'* は「*لَقِيَ* *laqā* 捨てられているごみ」、および「*لِقْوَة* *liqwa* 鷺」の複数で、al-Tibrizī, al-Zawzanī は「鷺」とし、al-Anbārī は「ごみ」と解している。訳は al-Anbārī に拠った。

38) al-Tibrizī のみにこの一行がある。

39) اِرام *Iram* とは伝説上の اِرام (عَاد *Ād*) の民を指すが、ラフム朝の祖先が古くからの血筋につながるものと褒めたもの。

40) الشَّقِيقَة *al-Shāqīqa* は شَيْبَان *Shaybān* 族の氏族で、Amr b. Hind 王のラクダを奪おうとして、قَيْس *Qays* b. Ma'dī Karb (أَبُو الْأَشْعَثِ بْنِ قَيْسٍ *Abū al-Ash'ath b. Qays*) という者に率いられて攻めてきた。「軍旗が多数」ということは「寄せ集め衆団」と見られる。

41) قَرْظ *qaraz* とは樹木名で、これが良く生えている土地 al-Yaman を指す。

42) اِمْرُؤ الْقَيْسِ بْنِ الْمُنْذِرِ بْنِ مَاءٍ *Imru' al-Qays b. al-Mundhir b. Mā' al-Samā'* を襲った。Bakr 族は後者を助けるために参戦した。

- 77- フジュルは戦いにおいてはライオンのような勇士で、赤ら顔で足音を忍ぶすが、早
 魑凶作の年には春のような人物であった。
- 78- だが、われらはまるで井戸の水面に下ろしたバケツを振るように、槍を振るって突
 きを入れ、彼らを追い返した。
- 79- われらは、足枷をはめられて長らく捕囚の辛苦を余儀なくされていたイムルウ・ア
 ル=カイスを救出した⁴³⁾。
- 80- われらは、アル=ムンジル (イブン・マーウ・アル=サマーウ) が殺された報復とし
 てガッサーンの王を殺した。流された血は推し量れないほど多量であったが、やむ
 を得ない仕儀であった。
- 81- われらは彼らに捕らえられていた由緒ある⁴⁴⁾家柄の9名の王子らを償った。彼らの
 戦利品は高価なものであった。
- 82- アル=ジャウン⁴⁵⁾のもとにはバヌー・アウス家の軍勢が控えていたが、彼らはまる
 でくちばしが曲がった鷲のような獍猛な軍団であった。
- 83- われらは (このような強敵を相手にしても) 戦塵のなか怯まなかった。ために、戦
 火が燃え上がる中、彼らは背を見せて退いた。
- 84- われらはウンム・ウナースの子アムルを身近な縁者として生んだ。それは、彼の父
 が彼の母と結婚するための婚資がわれらのもとに届けられたあとのことである (し
 たがって、われらは王と兄弟関係にある)⁴⁶⁾。
- 85- このような親密な血縁関係ゆえに、われらは人々のために王へ誠実な忠告をするの
 である。すなわち果てしない砂漠のような忠言をするのである。

43) 'Imru' al-Qays b. al-Mundhir b. Mā' al-Samā' は 'Amr b. Hind 王の兄弟。父 al-Mundhir がだまし討
 ちに会ったとき、Ghassān 側に捕らえられていた。'Amr b. Hind 王は Bakr 族を率いて Ghassān
 領に攻め込み、敵王を殺し、'Imru' al-Qays を救い出し、皇女 Maysūn を捕らえて連れ帰った。

44) 「由緒ある」は al-Tibrīzī の كِرَامٍ kirāmin に拠った。al-'Anbārī の نَدَامَى nadāmā (「نَدَامَان nadamān
 仲間」の複数) では意味がとれない。

45) al-Jawn は Kinda 王の一人。Qays b. Ma'di Karb の従兄弟に当たる。

46) 'Amr b. 'Umm 'Unās は詩人 'Imru' al-Qays の祖父 'Amr b. Hījr al-Kindī のこと。彼は 'Amr b. Hind
 王の叔父に当たる。即ち、王の母 Hind は Kinda 王であった 'Amr b. Hījr の娘であった。

池田修「アルムアッラカート試訳 (V) ——ヒッリザ——」

	誤	正
5 頁 14 行目	الصَّحْرَاءُ	الصَّحْرَاءُ
5 頁 25 行目	تَعْطُ	تَعْطُ
5 頁 27 行目	مُكْفَهَرًا	مُكْفَهَرًا
6 頁 18 行目	جَمَعَتْ	جَمَعَتْ
7 頁 18 行目	حَزَنٍ	حَزَمٍ